

第一章

故郷の母が脳梗塞を発病

## 突然の電話

「もしもし、姉さん。母さんの様子が変なの。手足に力が入らなくなったんだって。病院ではたいしたことないって言われて帰されたんだけど、立てなくなっちゃって……」

それは妹からの突然の電話だった。正月に帰省したとき、母はいつもと変わらず元気だった。あれから一週間もたっていないというのにどうしたのだろう。不安な気持ちを抑えながら、「もう一度病院に連れてったほうがいいんじゃないの。何かあったら、また連絡して」と携帯電話を切った。

二〇〇六年一月八日。その日は三連休の中日で、妹から電話をもらったとき、私は御茶ノ水の画廊にいた。知り合いの画家の新春日本画展を見に、友人と一緒に都心まで出かけていたのである。一瞬、すぐ実家に駆けつけたほうがいいかな、という考え

も浮かんだが、「病院ではたいしたことないと言われた」という言葉を信じてそのまま、久しぶりに出かけた都心の空気を満喫して帰った。

結局、母はその夜に入院。私は翌朝、車で二時間半かけて病院に駆けつけた。ベッドに横たわった母は私の顔を見ると「遠いのに、わざわざ来てもらって悪いね。左の手と足に力が入らないんだよ」と今にも泣きそうな弱々しい声で言った。若干、ろれつが回らないような感じもするが、意識ははっきりしているようだ。

病室を出ると、妹が暗い顔で「とうとう、この日が来ちゃったね」とささやいた。医師の話では脳梗塞らしいという。脳梗塞って確か、脳の血管が詰まって半身不随になったり、言葉が話せなくなる病気では。死に至ることもあるらしい。なぜ、母がそんな病気になるのか。血圧だって、確か低かったはずなのに……。信じられない思いで、呆然と立ち尽くすしかなかった。

果たして立てるようになるのか。車いすの生活？ それとも寝たきり？ 「いつかは」と覚悟はしていたが、とうとう老親の介護が現実問題として私の身に降りかかってきたのである。

母（七五）は年老いた父（七八）と二人暮らし。隣に弟夫婦と孫が住む。弟の子は

まだ三歳。妹も私も結婚して家を出ている。さて、母の介護は誰が担うのか。一人残された父の食事の世話や洗濯は？ 一家の柱である弟をはじめ、義妹も妹も私も仕事をもち、しかも全員がフルタイム勤務。仕事と介護を両立することができるだろうか。誰かが仕事をやめなければならなくなるのか。いいしれぬ不安が胸いっぱい広がった。

確か巨人軍名誉監督の長島茂雄さんも脳梗塞で倒れている。右手足と言語に障害が残ったが、厳しいリハビリの末、杖をつきながら歩けるまでに回復したようだ。母は左手足が動かないという。右の股関節が大きく変形して、もともと右足が不自由な母は、左足までだめになったらこの先どうなるのだろう。

入院した病院の専門は内科と外科である。三連休の中日だったため、消防署で休日当番医を聞いて、父が車で連れて行ったという。母を診た内科の医師はCT検査をして「年齢相応の脳だ。たいしたことはない」と言っ、自宅に帰したそうだ。家を出るときは自力で歩き、車に乗れたが、家に帰ったときはもう、自分の力では車から降りられなかった。弟夫婦が両脇を抱えて車から担ぎ降ろし、布団に寝かせたが、状態は悪くなる一方。トイレに行くにも起き上がれなくなり、車で一時間ほどのところに

住む妹を呼んだ。妹が実家に駆けつけ、姉の私に電話をくれたのである。

その時、家族の誰にも「脳梗塞かもしれない」という考えが浮かばなかった。もし、誰か一人でもピンとくれば、もっと早く適切な治療ができたのではないか。そんな考えに私たち家族はその後、ずっと苦しめられた。

それにしても、母を診た医師はなぜ、すぐ入院させてくれず、自宅に帰したのだろうか。医師の意識の中には脳梗塞かもしれないという考えは浮かばなかったのだろうか。コント55号の坂本二郎さんはゴルフをしていたとき、脳梗塞を発病した。一緒にプレーしていた医師が、二郎さんのクラブの握り方や振り方を見て脳梗塞だと察知し、倒れる前にその場に横になるよう指示して安静を保たせ、救急車を呼んですぐに病院へ運んだ。そのすばやい適切な処置のお陰で、二郎さんは奇跡的に回復し、再び舞台に立って活躍している。

もし、妹から電話をもらったとき、私に脳梗塞の知識があれば、すぐに脳外科の病院に運ぶよう伝えられたのと思うと、返すがえすも悔しい。でも、起こってしまったことを悔やむより、これからのことをまず考えなければ……。結局、その夜入院した母は、血の固まりを溶かすための点滴治療を受け始めた。